



木曾路名所圖會
一坤

ル 3

ル 3
3261
2



遠景山總見寺

本尊十一面觀世音

三層塔 莊嚴 如來 服 士 毘沙 天 不動 明王

圓通閣 辛堂の彫刻の類

總門類 信長公の御書 總見寺の御書

當山は天正三年信長公の御建營ありて用山と剛可和尙

寺領は今年二百廿石餘附屬ありて寶閣壯麗ありて清淨無垢

の梵刹之幸堂の中此部を見らば將壯永徳が御書ありて男之其

と棒を携へ救濟城約する國あり 信長公其續云 人より身をばさくみとてたすすて

心をも身をばさくみとてたすすて

今も代衰りて香火寂寥とて雲佛屋瓦花く猶勝す

門 4
號 239
卷 2



信長

晴し樹々を緑屋小遊くよりて老く更し青く月ハ湖と照し

てむしにあらざるをあらんる

安土山古城

信長記 公の墳墓あり今ハ城中の石垣に在り

正二位大納言兼右大将平朝臣信長公は國安土山を城郭小構可

有御移し之奉約は惟住み即左衛門尉長秀と可記是方天正四年

丙子正月下旬被作出し長秀之兄の指圖御體を奉く日十七日

安土山より先書信不可入奥且或は張治表匠成も石集ありハ

石と取べきハ持運て之を通路活活とも云に服崖とも云に之を

走白く敷と目小繕く急る二月廿三日小信長公安土山被移御座

移力と劬と幸神ありとて周光家流兼駿馬二匹長秀小下され

名を依進御外孫馬廻以下の屋浦刺ありされハハも慶元山上下も

更中堂池なるりて四月初より廿九日石垣の石を引せらるふ之石を引し

本居

也之石を引しより幸巨靈抜山鳥糞上千鈞小吳し其功已小成以都て信長公幼より弓矢に推して仁義道德の學を
勢好子ども自然小私心形く理小脱く切り其功の益進む幸恰如春
氣發生貴罰心く邪正公辨ゆ幸生知も中川谷く激小方寸
虚明るゆふ人の思ひはれある幸自西自東自北自南思て服せ

安土殿守 天正四年七月より 普清御付し所

普清奉行 本村次郎左衛門

上一重之金具 後藤平四郎殿之

二重目より 京形對阿弥金具

序丈工棟梁 岡部又右衛門

小細工序丈工 宮内遊左衛門

漆師 首 刑部

瓦焼

唐人一観

李長虎の瓦焼

土基土瓦の鳥格七間併は上七重の天守城造らる御代未定の經
 常より先一重と土瓦小用九二重は上の廣サ南に二十間東西十七
 間高サ十六間中これあり柱の數式百四格サ五柱の長サ廿八間を天守
 或は天守四方之沖産敷の内みか黒漆を西十二重敷の金の張付
 墨繪梅花狩野永徳の筆之同間の内書院これありあふ遠寺晚陸
 の画其木の版少六盆山石瓦屋承の四重中の沖棚少六格の画又十二重
 此間少六格乃繪園之鷲の間より上は八重敷奥四重敷籠の雜と
 毛より南十二重敷少六漢唐の儒賢の画次は八重敷より東に十
 二重敷次は八重敷其外は八重敷これ六沖膝格の所之次は八重敷
 右はのりより六重敷沖納戸又六重敷を六沖膝格の所之次は八重敷
 小土瓦あり其外八重敷其外六重敷沖納戸より西六重敷次は十二重
 敷日十二重敷都合沖納戸の敷七所これあり其外に金地焼を湯と

玉取

三重目十二重敷花巻の画とありより別小四重敷の
 沖産の圓あり日花鳥の絵次は南八重敷賢人の間より上は小瓢葉分
 駒と知ん仙人の画東北庇の間八重敷十二重敷間上は八重敷仙人
 呂洞賓傳説等の画あり北二十重敷少六駒の繪次は十二重敷少六
 西王母の画西産敷少六絵あり廣楯二版廿四重敷沖物並に沖納
 戸少八重敷の序敷あり柱敷一息格幸に持あり
 四重目為十二間絵と巖上小龍虎の類小絵あり南十間竹の絵
 竹之間より上は十二重敷松と画に松の間より上は東八重敷相小風
 風の絵次八重敷許由頼泉龍居て耳と解小菓父牛と書あり
 屏ふ兩賢の如くは放郷の侍中て一画其次小産敷七重敷絵
 形に金泥をよりけ次十二重敷は内二間の所小手鞠花と画を其
 次八重敷庭子に家公画を敷小産此間より上は



安土山佛古
遺構山上寺
度閣倚雲霄
草木榮茂古陸東
賦慨空懷若全盛
日徑管一河工採池
均江水樓基以秦
宮刻據形未已征
馬驅西東豈知身
上憂台起蕭恤中
慕運泉砂嶺三日
聊林旌茶天自
予之低手彼豐公
世之二百集電運台
夢同孤冢雲峰淚
茂翠草青惹香
火長昂首梵傾
月暮風

西歌服那蕩



安土山
總見寺

本為一卅九

信長記云

五重目録あり南山の破風は小四重を此方あり内外ともに色柱
朱塗内柱金泊る繪と叙る成道後法の圖十六大弟子各國に
佛極例鐵鬼諸鬼を画し端板小飛龍狀画し高樺葱實珠彫物
あり上の七重二間四方佛座あり内也金泥るの外輪も亦金泥る
四方内柱昇龍降龍天井小天人彩向の躰と畫し佛座後此内也
後三皇五帝孔門十哲高田皓晋七賢坐の公画に狭間の戸織物之
敷六格好品柱みね黒漆也布と着く其上堅地小黒塗る漆以
言也一員板あり其の壯觀
其頃天龍寺に妙智院兼夫和尙とて碩学多才の活佛あり殊小
大明再渡和漢兩朝の達人なる由奉世のありたる信長公より安
土山の記を佛不望ありたりとされども因替し中これ幸濃別彼下南
北和尙とて名偏ありたり則此佛不修付され然るに惟んとすこれ
六板く其旨佛徒ありけりも亦兼夫和尙へ令せり是宜あり此
本卷ノ四十一

互不詳し合まじりても合致なれば詳する事有りて別筆を
傳はるる其記あり

總見寺圓通閣小掲る

古曰太山之前難為山大海之前難為水日域六
十六州之一州曰江江左有山名曰安土其山不
在高其名高大山也蓋夫非山之獨得名有寬仁
大度人居焉也劉夢得不豈曰乎山不在高有仙
則名水不在深有龍則靈夢得之一言可并按焉
層巒之崎嶇乎上者自然金城也滄波之渺茫乎
下者自然湯池也自天地開以往雖有此山一人
無識者矣葛原帝王的令孫平清盛其一代之
華曹前右府君者禁庭綱紀武門棟梁而實天縱
聖武也先是天正四年之春一見此山便識萬古

城地開闢洪基權輿于此矣力士星馳揚石巧匠
霧列運斤則不終三年而其功大成矣潛慮夫數
百丈之石壁十萬間之大廈何翅力士之力巧匠
之巧乎唯流出府君之一胸襟而已目機之所明
意匠之所巧離婁之明公輸子之巧不可跂而及
者也峻宇高堂之凌碧虛者也極夜摩都吏之壯
麗兮直欄橫檻之聳翠崖者也盡秦樓魏闕之華
美兮布地礪礪者兼露內潤葺屋瓦甍者帶霜外
光西湖月之上玉階者供府君之夜遊也南浦雲之
飛畫棟者催府君之朝吟也颯颯松風之動金鈴
聲呼萬歲山耶紛紛白雪之映珠簾影含千秋窻
耶權門貴戶之圍山穢然也遠水鱗華也盡是無
不丹漆黝亞寶塔之突兀出林間者疑繪遠寺釣

艇之ノ一浮蘆邊者怪圖歸帆瀟湘十里風景嘉
陵三百里山水不可同日語焉英雄豪傑之擁繡
鞍出入于相府貴介公子之翻錦袖往還于官途
爭紅花紅葉色也億兆民之富驕者鐘鳴鼎食之
家也見者反目駭汗聞者拍手賞嘆矣江北白鷗
懷惠占閑江南梅花被化含咲信及豚魚咸知草
木當此時市人歌于市野老扞于野行者遜路耕
者遜畔雖堯舜民文武民不可讓焉加旃起王道
之衰修神社佛閣之破續斷橋平險路是故四夷
獻貢來復焉八蠻解辦服膺焉或臂俊鷹乞臣手
其幕下或上良馬請將乎其麾下吁策勳偉矣哉
鳳凰現瑞麒麟呈祥者非今時何時乎祝望祝望
向所謂太山之前難為山天下人亦將曰安土山

新實之桑



之前難為山。野一衲雖蓬衡叢州。擗散陋姿。管見此
 名山。豈無感慨乎。卒綴早詞於八韻。述盛舉之萬
 乙

伏乞

咲覽

六十扶桑第一山
 宮高大似阿房殿
 若不唐虞治天下
 蓬萊三萬里仙境

老松積翠白雲閑
 城嶮固於函谷關
 必應梵釋出人間
 留與寬仁永保顏

岐下沙門玄興拜稿

信長記云

信長公沛言也。不意卜名。六南化和尚。黃金百兩。小社三尊。將建。又
 必常沛使。其勞功。對也。所又兼表。和尙の謙德。甚沛感。有て
 金子百兩。銀子百兩。小社三尊。二位。法官沛使。とて恩賜。せられ。乃
 後。謙德。却て光。多。う。六箇。様の。半。以。や。ゆ。れ。け。の。素。性。を。河

幸も拜獲して已達其人と達せられたる幸ありて之を金原玉原
と云ふ其地を自ら自民の安きは國を天竺寺破壞の跡に補ん幸と
せしむるなりと云ひたり漢齋と付たりは是れ其地を補ん幸と
云ふ此地を補ん幸と云ふ言ひたりは是れ其地を補ん幸と云ふ
許と云ふ世の人今も其地を補ん幸と云ふ言ひたりは是れ其地を補ん幸と云ふ

抑以城之信長公天守城を築きし初より其威勢強大にして
城を天守と建つる幸は付たりは是れ其地を補ん幸と云ふ
夫の家訓は百千の大慶の始と云ふ人名を補ん幸と云ふ
是る幸 秦の阿房宮を築く考は付たりは是れ其地を補ん幸と云ふ
年六月十四日未明小安土城の天守小明智左馬助大坂教ち所
建つる幸 秦の阿房宮を築く考は付たりは是れ其地を補ん幸と云ふ
是れ其地を補ん幸と云ふ 是れ其地を補ん幸と云ふ 是れ其地を補ん幸と云ふ
院殿の古蹟は建つる幸 是れ其地を補ん幸と云ふ 是れ其地を補ん幸と云ふ

敷山乘實寺

一七和のゆきつて所沖共竹生湯多事傳と云ふ不向云云
比良嶽比殿の高根也意の幸むり長等の山列を遠く眺むる
あじの炭を産み見たりと南の方を回周眺むると之上は
風景東に乘實寺觀音寺の古殿あり南生野荒蕪と云ふ
みれば城の眼下に遠くは押織田家の滅亡を望みし秦の秦城亡を教
ふるは只天令りて一睡の長乃是る如くありて思ふる

本尊藥師佛 十二神將 願光

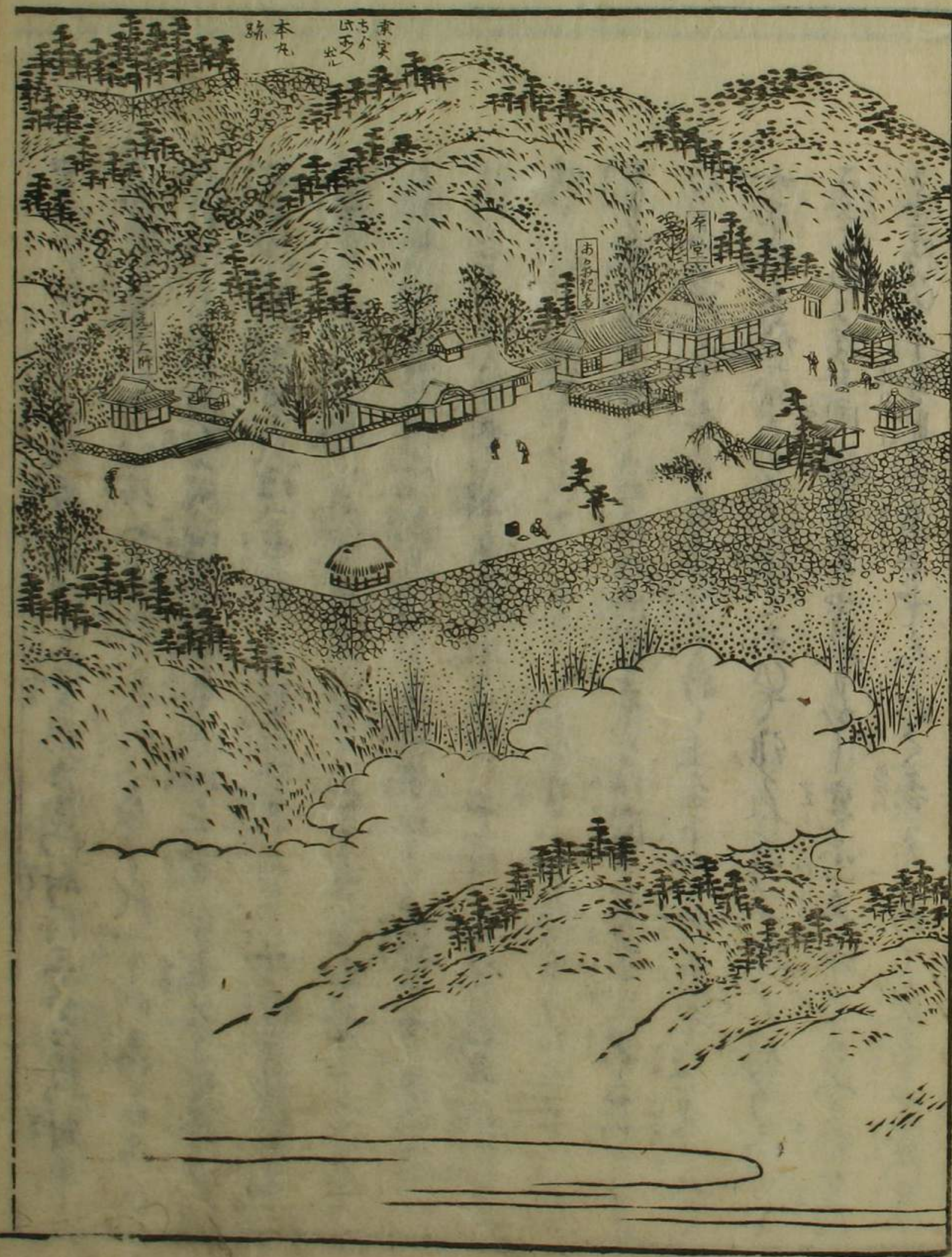
當山は古寺ありてむり白鳳六年奉尊湖水より出現あり
其後元明帝の御宇藤原公の息定惠和尚庵を築き
奉寧と號す是れありて植りて是れ其地を補ん幸と云ふ

箕山古城

東山道武家より一里許
右の方あり

去程不抜齋齋兼禎子息石虎督義勝も兼て家老の者た石虎信長
 南國本意向せは定て海道筋の城を先攻めし御座留山の城は及
 の手宛てて肉を搦めたりは幸ひして南郡も幸ふあつる兵
 城をぐる勝る益玉一信長は南軍の領國を毒ねりて之は海血
 の難易苦形くび不敵の傑所をも略城入を爲ぐ一也回寺せり一六
 親善寺和留山へ押寄る様ありて和留山中は兵隊之入を押し
 居られ和留山より奥なる其地の方所と押廻し居る本按本
 相遠くせざ見えたる信之右衛門尉本下藤吉希丹羽立高左衛門尉
 浅井新八も兼て其地の責も不定なる幸なるを關を焼くけく攻
 寄る不城の肉もを吉岡の河東建部源八も兼て花丸山中人殺と
 下一とさ人せしけし不態と弱くや命殺し人殺をうり寄せ息
 城も終に叫と喚んぞ攻る間けけし城中人引れんと走けるを遊佐
 山のまより早能く兵も或百騎許討た勇ふいさる幸なる

け勢とぬる家めれや者ども中人の大将言は掃く下知しけりて
 より中む所ありけりくあもたおむるに取部く中城屋付て
 旗は物る人せと殺入打面もては込入んとてはれも款くくや
 思ひ及んぬ取部て其不務もするに飛く中人とひはれを信之間が
 多小與せし信之間久六原田與助本下多小與せし竹中半三
 將領實老爲尉本村隼人丹羽多小與せし林志鴻形く言
 々れど是と持と持と信ども一命取助られし旗とを降を降不
 して降之きと申す間即は由を口人の大将信之を多小信長は
 も幸なる多小ありし間信之る進もあすの城中の者ども一命
 と助も降を降る中居れとぬるに信之を何ひやれ六鬼も
 南軍の能く小半ひ信之と堂の一方其地取れし勝國を降
 とせよたりたる信之本案よお送してせりてたりは其地城落
 去せし信之和留山の城も其夜開退く親善寺も鬼やせん南



観音寺山
 鷓鴣城址
 観音寺



やあらんせしめれ難きなる小三雲新左衛門尉日三右左衛門尉申
身と金うしく時言成侍て夜舎枕背の恥を雪んと思召さ疾きれ
等が居城へ逃せれ此へ去れ家老の面々の計存られ此を声
放そ申すれ吾も肉く退くありむと志せられたるそのわ
あの鬼神の操る信長小守りも成果中く敵討中幸思ひもさ
に惟そさば夜も明らむ早そく中目トれれ救幸信別
所るれ好波とくいあんれども上下小舎成助うりけ思入る
自れ執事と切くわ何の御曹子成れ誰園中せり丈其は何と
形どり許事君臣上下此分も形く上を上と親善寺坂と下立
女子共と聲成りわ小悲とあひて誰れも言ふ聲く修り小分も
ささる形も同得く言さるりか一毫小半平家の人々都を落
させ給ひ一斗匙と角やせとれと表り形て親善寺の城を落

去くは兵討く小権藤一城共一日二日の内小十八箇所を退き
其外味方も降る事とば人質を取其内小己ヶ居城も去れ
退散したる城々兵宗徒の人々入るれわ抑迫り國中の城々將素
倒のてく波羅とて落去りたる幸ハ信長郷の一物様よりわ
お練るるを智留山とて攻めりけり能く能く兵は多くせひる
箇所よとてりし中りれ兼て敵の謀謀よく聞取らるれは角
と事よりなれ鳴保謀畧の益する幸奉てやさんもいつ半そと
井が家老小倉尾英化中たりは兵侍の人安ていさ智謀の深さ
東より後天や漢の高祖の天に保れを居るも張良の如く謀
帷幕の内小めら王若此作中成し幸も有り今味方の將小本
下秀吉あり深慮外小ありは幸如漢高祖の如く漢を
其地山の尾續き小平坂とあり
小松寺 平重盛の建立ありとあり
瓦屋寺 小松より十間許東にあり聖徳太子の所建意の寺あり
むり 南坂東之寺の尾を以所めく焼くとあり今ハ孫宗

織山 觀音心寺 辛酉 通清水鼻の左乃山上より

奉尊千手觀音 長三尺三寸

毘沙門天 不動明王 四天王

關伽井觀音 安徳 升雲ふ

元三丈降堂 辛堂の西面

當山と織山五箇寺の其一ありて聖徳皇の奉創之をねり

依之本家近州を依りて修造敷より織田家の騷擾少く

むしに爰に軒相なり

觀音寺古城 信長 小隣 今小石壁

足利義昭と光源院殿清全身南地一宗院淨門主聖度得業と

中事敷出小三好友系を更義継反逆して義輝公と殺す清全身

覺慶公も討ち死す謀ありし瓜圃石是南地を世に傳はせしむ

本考二四七

辺江の觀音城を清應ありはれども兼頼父子に義昭三好と其比一味

を少少動きたれば討ち死す企ありしと小園と對しては法全義

景公慶のひかとも果さば因茲濃長波年へ赴き織田信長と清の

ありはれを即君臣の禮を言んと合辭し大津房治の首途小辺江の

依之本城攻めりし石月ありて無化味親善山和回ると成城一其

外羅城十八箇所三日の内攻めりて一為し平均し永禄十一年

九月十二日上洛し三好を亡し中望公遂會松島の如く言はれしむ

それより義昭公將軍に任じ給ひたりし義昭公と信長と石快は

其幸と信長叔父の陳書公望に義昭公收び給はれりし

甲斐信玄と針とを以て両公の間隙を容れしむと遂に手相と

形ふ元龜三年七月定法松橋不指松橋は信長要致し攻

敗る義昭も方なく河内を去りて城に據るありし勢ありしと因茲

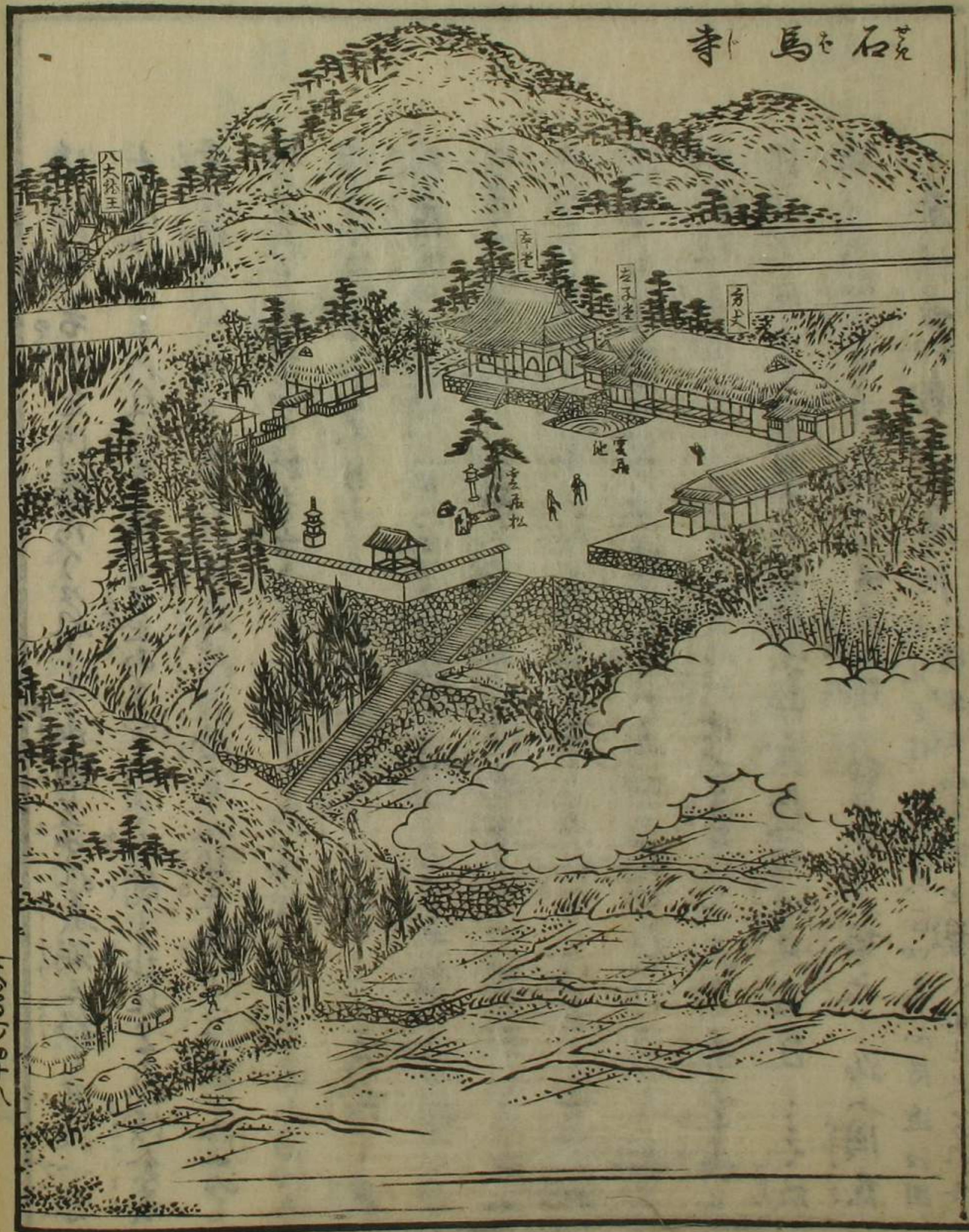
京都信長は幕下小僧に 或記云信長公天正四年正月辺江四

八幡安土山小僧と築くありしを

越之獄地



石馬寺



地獄越

難トて此坂は伊勢と云ふ所ありそれ故に類く安土と云ふ所あり
 此坂路甚険し之て細く今も此坂を越る者少く安土と云ふ所あり
 此道不逃落し者救ふはあつたはるはる此坂を越る者少く安土と云ふ所あり
 根不強固して倒轉す其上に成りて逃る者少く安土と云ふ所あり
 此坂より見れば安土山の麓より湖水漲くやして眼下に八幡の
 市中長命寺の山並み多し墨江遊小向ふ坂は此坂を越る者少く安土と云ふ所あり
 比叡山比叡の高根ありと云ふ田舎の地浦と云ふ所あり此坂を越る者少く安土と云ふ所あり
 此坂の所あり此坂の所あり此坂の所あり此坂の所あり此坂の所あり
 て清海一列の風景乃地獄越

それより此坂は通るべきを

これら乃本葉落たり地獄越

難

織山石馬禪寺

神祇那石馬村の上小あり
 禪宗派家妻と云ふ所あり

本巻一四十九

高宮の駅此
 やつとら
 紅葉ありふ
 保つて
 山
 布織坂
 多く織て
 國へおと
 その名を
 高宮寺
 とす



本尊 弥勒佛 惠心傍都の地

南無佛太子像 淨自作

四天王大像 鳥佛作の地

十一面觀世音 右日地

地藏尊 運慶作

閻魔王 小舟堂作

其外竹實は朱夜の釈迦佛と唐思恭の等不動尊弘法大師

の弟弥勒二尊の惠心此等跡見不動明王と元三大師の書とあり

役行者の惠心と淨自作形

八大龍王社 山頂あり 富士山 積雪とて 旱のとき 農民

等と名其時 淨神像あり

柳道は推古帝此淨宇聖徳太子此二案の淨時 淨駒小石園内

狐巡視ありて此處靈地ありて 鐵とて 其五箇寺の一なり

又良馬もけ里ふと有り終不覺と石とあり 故不寺の跡と 其石
馬今寺の藤原農家の形あり 年歴千歳と云ふ 蓮乳の附大石荒蕪
せ 狐道年雲居禪降と云ふ 未門とむり 以て 其再言あり 則堂
前と梅あり 狐雲居松と云ふ 此禪降と云保の頂乃とあり 後光院
筆夜と賜ふとて 圓入

愛知川 名寄 高宮中を式里八町に宿と愛葉の名存ありて 能水と遇ふ

形り 流を一溪 桑と云ふ

け 野狐と云く 古橋村あり け 道と云ふ 布信と織とれ 高文流と

り 乃 野橋を過く 千枝村あり 乃 小四十九院村とあり 乃

由 結 狐 乃 乃 小 布 於 古 流 の 寺 あり

四十九院唯念寺 四十九院村あり 魁 率とて 号に

本巻五十一





本巻ノ五十二

古事紀云
神書鈔云

伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也

日之少宮者近江國犬上郡多賀大明神是也

近江在良方日之所初出也故曰日之少宮出

雲杵築宮在乾方故曰日之所入也

夫當社と天照太神乃とちの沛神也沛伊勢奈

宮の奉道を担ぐとち多々訪をるたり例奈を卯月二年の日

と我坂おんとて遠近のく高宮の所小群集して纏ひるも皆

は沛神乃威徳形之別表と不動院とて神領二百石石社地

してある所と芝布向う相撲ありて世々々々懸ひいんはは海川を

は國の大社ありとせとあり

多賀よを田就をほとひく一里まをわ歩免は名りしあり

不知哉川の堰ふゆふ

不知哉川 大坂村の東 堰あり

古今

いぬこれとのいぬいぬ川いぬいぬよ我名のいぬ

いぬあまあはれんとあまはれぬぬぬぬぬぬぬ

續十

いぬ川今や氷もあぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

鳥籠山

いぬ川の上あり

新古今

あまふちふ露の梳ふゆ 梳ふゆととこれ山風

ま本

は いぬこれとの末れ大上やすのふ懸るこの山風

日

鳴麻とみひぬぬととこれ山風の梳小聲送る

石清水八幡宮

大坂村御屋の左あり

は 色いぬいぬ根味下ぬぬ道向う又右の旁ふ多賀より街々

ぬぬ道向う東園より東流の道又小野村道の右れ上石佛

地蔵堂あり小町塚とあり

小町塚

小野村とあり名解しあり

家集

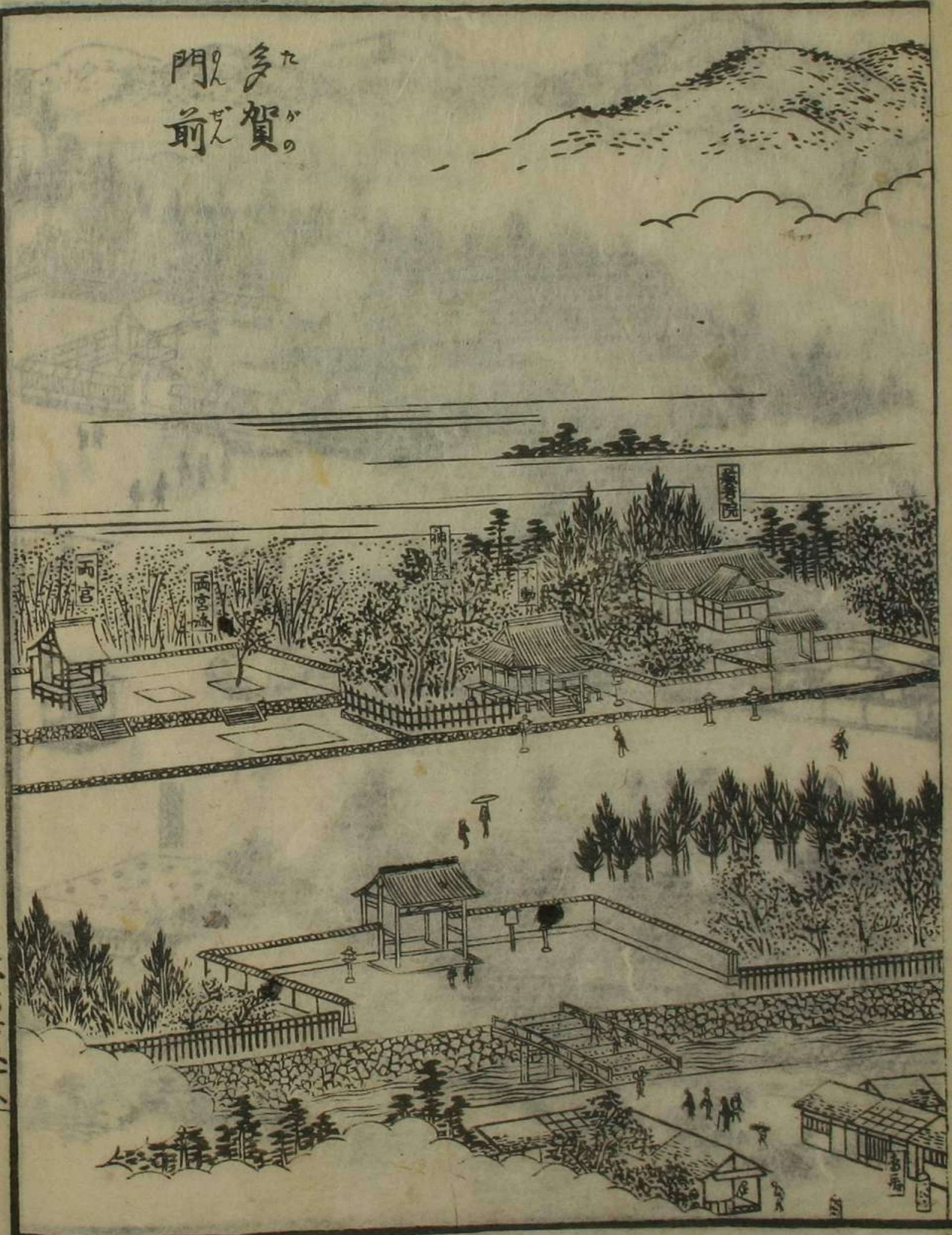
表らり我身の果やあま縁はあふと世の處とあり



多賀大社

迎年社頭
 儀々々々々々
 乃今今今今
 假令々々

多賀の門前



本居一五十二

鳥居

終るまで身は身を思ふに及ぶ所ありて
 番場まで一里六町むらり多賀社乃鳥居は
 名付ふ今も形も老朽まで一里八岐六里は
 丸信下鳥居赤王もいふ所あり

米原道 丸信下鳥居赤王もいふ所あり
 米原道 丸信下鳥居赤王もいふ所あり
 米原道 丸信下鳥居赤王もいふ所あり

磨針嶺 嶺の東店より直下せは服下小塚
 里長浜より小向ふ坂見まは外生海濱
 津嶽鮮本邊をて潮水洋とたる中
 美観より桑店より望湖堂と書きたれ
 と何ふ自芝の毫流人の年寄あり

彦根山 彦根山 彦根山 彦根山
 彦根山 彦根山 彦根山 彦根山
 彦根山 彦根山 彦根山 彦根山

彦根山 彦根山 彦根山 彦根山
 彦根山 彦根山 彦根山 彦根山
 彦根山 彦根山 彦根山 彦根山



鳥居本
神教丸店

これかおれ
あふりやぐ
とくあも
まの
あま
と

新書

夫本

日
よを懸す赤松の山北新日よんを晴く志く舞く之也
ふく松原 外と松原村といふ

後古

言ふより此を此松原に於て並死にす之を君と万代

儀寄社

松原村を過ぐ海邊二十町あり

系神日本武尊

儀村の生む神といふ例系四月八日

を人よとば名あり神儀摩比爾海とらふ右の方一町所
をりり入まば社あり

儀摩社

生む神といふ

祭神市杵嶋姫命

拜殿 本社の

若宮祠

廻り小回廊瑞籬あり

八洲本社の
新あり

本巻一五十六

経信

赤乳母

八咫口
お長

雜和集後類云

近江國流之由明神也。神事あり。其神乃御世といふ。女は男一たり。故に流く。流を流く。子の祭れ日。きてまはる。あり男あり。こゝたる。是見ど。新り。わて。かゝ。た。わ。形ど。志は。是。い。物。の。ゆ。り。て。あ。み。る。じ。こ。あ。先。を。教。農。お。し。て。い。の。神。を。た。り。り。好。ん。ど。す。る。なり。

あ。ま。ら。う。流。く。ま。の。祭。り。を。せ。た。は。は。る。は。ん。の。流。の。教。も。此。社。と。近。喜。式。不。載。と。る。る。坂。回。郡。の。月。日。極。神。社。と。ん。ん。を。む。の。土。流。の。附。く。神。を。被。さ。流。り。小。馬。と。て。ゆ。り。と。あ。ま。は。は。る。の。古。中。より。一。つ。出。く。ま。れ。あ。く。豆。の。飯。と。炊。く。答。意。せ。り。と。ぞ。聞。由。今。を。は。祭。り。を。入。げ。り。毎。歳。四。月。八。日。流。摩。の。生。土。子。乃。中。より。奉。り。八。つ。より。十二。歳。まで。の。女。を。紙。ゆ。て。り。り。と。を。流。を。一。つ。被。さ。烏。帽子。持。長。を。と。と。神。社。に。ゆ。り。こ。む。こ。

流摩野 神社の西此也

石

且妻里

流摩野の石上流り。む。り。と。は。地。流。り。て。變。易。の。所。と。り。之。の。は。世。は。新。妻。里。の。に。は。神。勝。の。地。く。た。り。ん。知。在。其。中。と。有。り。又。は。世。は。新。妻。里。の。國。の。神。事。に。ゆ。り。こ。む。こ。

日 流摩野の石上流り。む。り。と。は。地。流。り。て。變。易。の。所。と。り。之。の。は。世。は。新。妻。里。の。に。は。神。勝。の。地。く。た。り。ん。知。在。其。中。と。有。り。又。は。世。は。新。妻。里。の。國。の。神。事。に。ゆ。り。こ。む。こ。

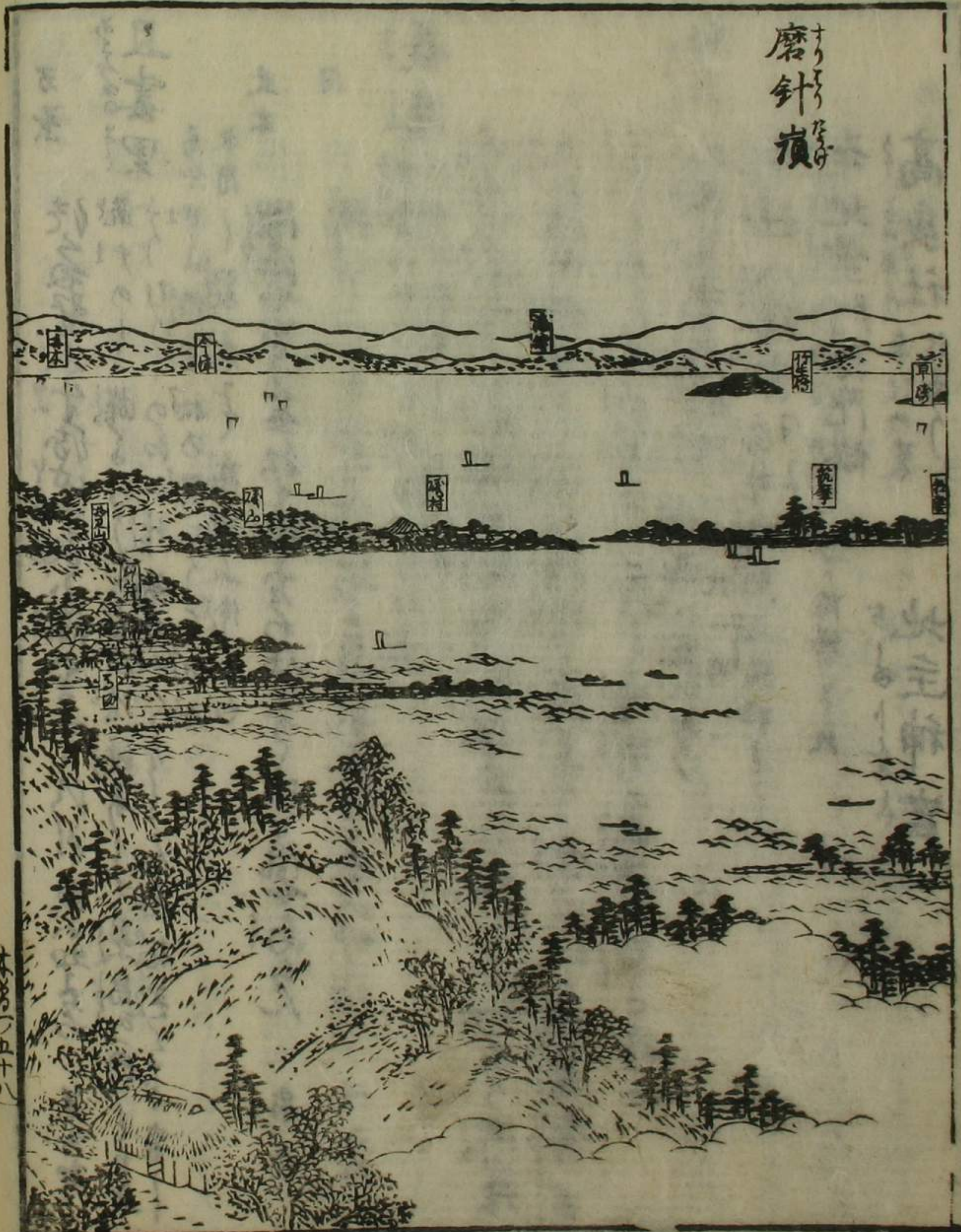
長濱

此。地。の。名。有。る。縁。編。細。綿。綿。約。折。其。外。種。々。の。物。あり。所。流。凡。み。推。所。許。あり。流。ひ。依。境。子。勝。ま。り。原。は。地。を。豊。后。秀。吉。公。より。め。く。御。在。城。より。こ。れ。ら。横。磨。の。姫。路。人。也。と。い。ふ。

將軍山放生寺舎那院 長濱八幡宮あり
幸社八幡宮 幸社八幡宮あり
幸地堂阿弥陀佛 幸地堂あり
高良社 幸社の東
地主神宮



磨針痕



本名(五十八)

熊野三所祠 西ふあり

薬師堂 日所あり

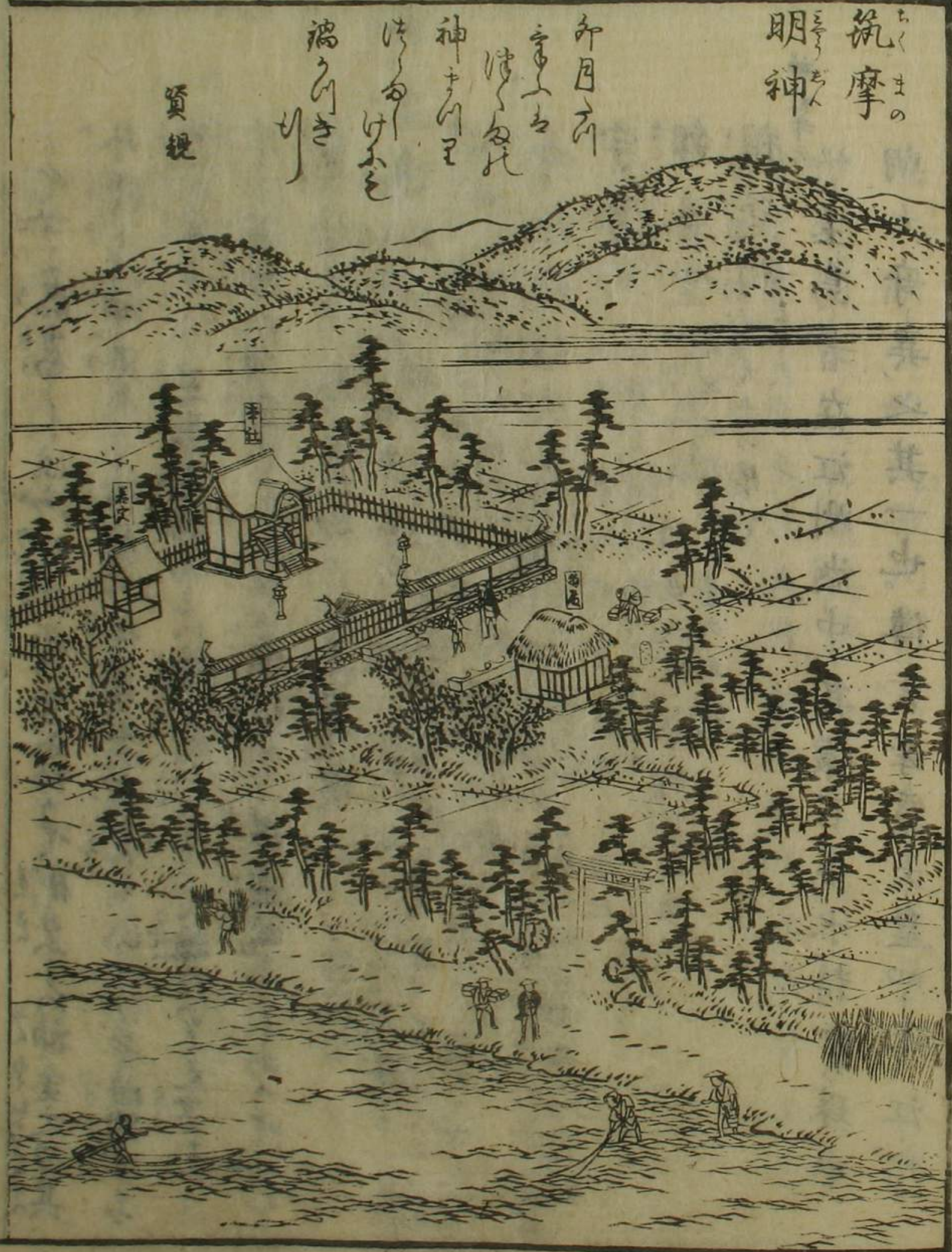
護摩堂 日所あり

稲荷祠 上と日あり

地蔵堂 上と日あり

當社之初き八幡を即義家公東夷征伐の時より勅修し其
 厚く尊崇ありて社於三千石寄附し其後後三徳院勅修前
 やり所の勅使下向ありせられ放生舎を祀りせり尚星野里ありて
 天正の代信長の代大いふ廢し秀吉公津左衛門尉再營ありて社於
 百七拾石寄附し其後坊中妙覚院の庭中の曾呂利新左衛門尉
 所之淺沼池焼石恩智の梅等これ庭ありて波舟臺の額を
 春源の所之例祭と九月十五日ありて泰山十二所より平社
 出でてこれ等を飾り其山の所よりつら及ふ風流の程云云を
 山のよりとて舞しむ至る壯觀ありこれをむむて遠近よりこよ
 る一二夜を泊し群集する事稲麻のやゝありて中長濱系

筑摩の
明神



新目あり
 言ふあり
 神あり
 流あり
 賢観

とて女子名高しは津波所西の方ありて例案を神室之刀其
外種とれ神樂あり神樂を秀吉公の代營のひしと世所事
案の糸目より芝居親物あるは拍子の店ありて徳ひし人方あり
室小英雄此後傑のまゝ先並ひし其遺風今もありて目を
喜むる幸鄙多し形くびる兒奇親之

竹生島

後井郡船中島あり海の島に一里水底の深サ南に十尋
東七十五尋西百十尋東の岩下の深サ東西一尋あり
本社辨財天女天女天女と号れ長七寸二分一
宇賀神左右二神阿味宇賀神と称れ
親音堂四臂千手像長六尺三寸行基の他
祖堂西國巡礼三十番の札所
神社考云

竹生島者在江州湖中其巖石多水精寶珠本
朝五奇異之其一也傳言孝靈天皇四年江州

地折湖水始湛駿州富士山忽出焉景行天皇

十年湖中竹生島初涌出云

昔行基菩薩來此島時神女現形逢基基初建
寺置辨財天女像竹生島什寶

小枝笛義經所持鼓筒靜所持脇指辨慶所持吉次太刀

依藤太太刀天狗爪馬角二股竹

傳教大師最勝王經弘法大師船板名狛

玄上琵琶撥松室童子琵琶七ナシカワノ毛

依藤太十種内露硯仁和寺覺寛僧正水精數珠

土像布袋弘法大師作矢嶋御所代々系譜

感通傳云云
松室の仲義小流く童ありて後水竹生島小棲一日童子來り
毎年三月十八日五竹生島小籠く神仙會ありて籠之其後より
願くは作の琵琶以傳人仲義これ小琵琶を与ふ仲義も湖水に

深き一夜仲あふの仲筆詠に

神のあはれ海のゆきまふうく花頼む仲の情う那

仲筆

此神出遊奇

妻の教乃流圓の白蛇物やけ漕舟うね月の人らん

二月十八日下生傳ふ船とほるぐ雲舟なるのふ喜樂空の須臾ありて

喜して船の内ふ落るものあり身まばさたも事よあふ下流芭

仲筆と神瓜抱き歎息止に別は花芭城とふ納く仲筆も後小

其面籠本登りて其終ふ不瓜志とん 叔書出

原平靈童記云

平經改は傳ふ指て神物法樂の物小一曲を強んて伝き琵琶とて出

形人やや室の安ん幸とて寺僧即琵琶と抱く興ふ神改めさ

よせ流して樂ニツニワ強く後弦上石上とてふ秘曲以強ト流小神

納交やとてふひむ社壇より白狐物と遊びる社不思哉かれ神

正花芭城園く神明の化理とあふけり思ひ祈願成就疑ありと

てうまうさふ

本居三十一

朝妻記

ひびと
朝妻の
里の磯
ゆたふ
神は
のてく
おまひ
さう

あられがり
こして
かまき
おほふ
うら

高嶺



あはれ人はあまの磯して
あふてはせうとてあま
原の松はきつひは流さしや
アハれあまの松とてあま
らなるとしてあまの松と
あまの松とてあまの松と
あまの松とてあまの松と

あつてははるかに山家なるに農家ありて推すありて後今を慮りて
名を抄して奉記を見せしるは堂とてより修む

八葉山蓮華寺 時宗の御中なる

奉尊 聖徳太子御地

六波羅山 寺より向うありて山とて元弘三年六月に罷

尚寺と上宮とを子殿の地ありて開基道日法隆住持と土肥三良

元頼即堂の左に方小墓あり時宗二十五世阿上人とて小春川とて

今宗とて元弘三年五月九日尚山本山の藤原一向堂の前に於て小條

の連族及び随士四百餘人京都足利勢と討負これにて藤原と

自害とて尚寺とて去慍ありて執事播磨十郎と死に

去程小六波羅系勢の合戦討負て関東へ落りて由披露あり

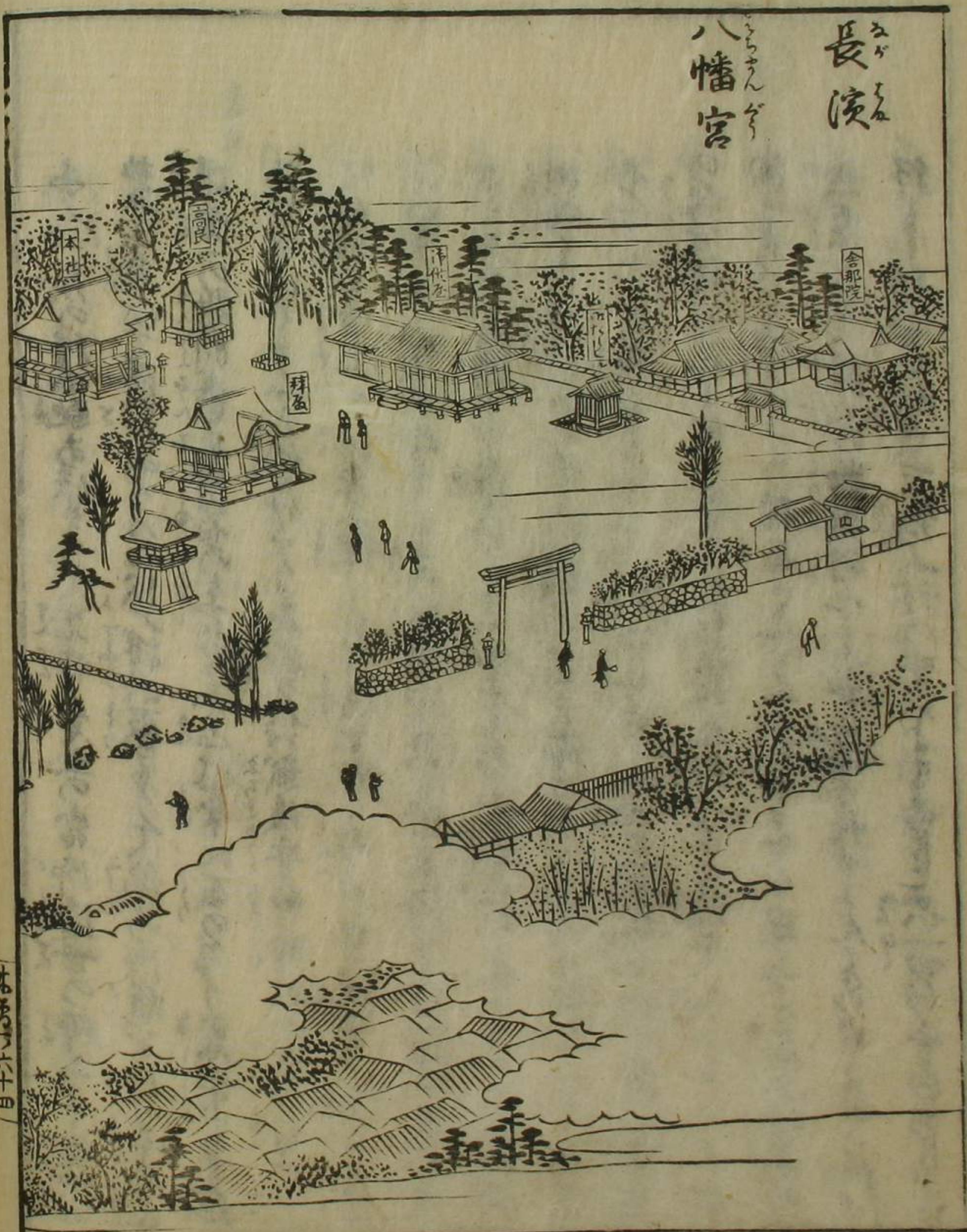
々々ありて此京日夏好ひそむ川小村四十九院とて針麦馬

解井柏原其外倅吹山の藤原とて心とて強盜溢進者ども二二

奉記云

本巻百六十三

中人一旅の程小馳をほきまりて先帝才女宮御道世の倅あり倅吹の
藤原とてびて津原ありてその坂之將小坂ありて綿乃津藤とて上赤山
道弁一の難所畜馬の宿ありて小坂に筆に取の宿ありて下なる細
乃を中にもとてなつてありて表ぬれば城後守仲時奈の宿ありて
て仙躰とて山の下に宿ありて其の宿とて此の宿とて八幡寺に其二子孫
小ありてこの宿も亦ありて今もこの宿も七百餘ありて足
ざりてその宿も亦ありて追うけざる幸も亦防交は是とて作本判友
附信瓜後時ふおせしれ賊徒道を為さず幸ゆふおちして乃を
あけしとて槽谷とて希小先陣を打せしる響雲流小流とて馬
の宿とて越んたる所小坂千れ歌道中にもとて楯を二面ありて交を
瓜子後とて宿ありて其の宿も亦ありて今もこの宿も七百餘ありて
悪意どもが為人の物具割んとてせしる響雲流とて人なりてあて
行るは命を惜まざる我小程の事ありて只一むけふありて



長濱
八幡宮

大正十四年

捨つと云ふは二十六騎のほゞも馬のさへ成るまで殺しけ
つつけ一陣とてあつては伏し百餘人するの處より上りて二
陣の勢小迹より精若と一隊の軍にうら勝今かよをもよ小隊か
者ありせんと安くさひて勢勇のしれりあふこ色と末の山崎成
遥小見のしれれば旗一流しは虎よりあつて兵六千
人が相要言成よ何てはつらう糟若二隊の敵の大勢と見え
退屈してせぢける言々つけ破れんとされ人馬ともふはれて款
険過小交う相迫りて矢軍成せんよまは矢揮ふ射すて
款そくなくはた勢あり鬼もを角もつらうなぐともせうなぐ
驚よけまのちろふみかどうおく後陣の勢成ぞお侍る越後さ
先陣小軍あつと聞て馬と早めて馳本より糟若二帯越後もふ
て中陣より矢取の死ぬる死せぬれば死をこるとする
したる死せぬく我者故とて討死せぬくひつらうの二日の命

本巻の二十六

成幅とてあれはで落とて来つと今言ひるは田中兼光のさ
つらうに成幅の落ふはとせん幸に橋を推しはる小陣の二隊
いつ身命と捨と打拂ひても通へいけ推しはる小陣の二隊
初より謀及の張本にさひひつらう折と得て兵徳園をば通さ
せ仕りんとせん吉良の一族もなぐれば不意せんとて遠江の
城と據て作せ風吹ひつらう安全の幸いつらうこれ成幅ふけ
ての退治せん幸恐くは万騎の勢もつらうけひつらう況やわ
人の身もめく人馬は小流うれ美の二筋成もつらう射力も
かく成て作つらうつらう成幅のひさきた後陣乃作本成流
迫江の國へ引つらうつらうつらう城本たて勢ひて雲東
勢の上落つらうつらうと津持つらう中陣の越後守仲時もは
と存せぬも作本つらう今つらうつらうつらうつらうつらう
それの進退つらうつらうつらうつらうつらうつらうつらう

さぬい堂小僧くたすにて時信が待てくこ我を評定あつめく二百餘
騎此兵もみおは堂の庭も我よりぬる佐々木利友時信と一里
むりり引さうりて三百餘騎打たるがうつふか天魔波旬の志いさきう有
る六波羅殿と表馬の侍と世伏せふ取られ一人も逃れられ
活ひたりとせ告りたる時信今いさ危れ中うあつりたる事とあち川
より引起し得る本成と系部へ登ふなり越後守仲時志づくと時信
と違しと侍のひるが侍期を死に侍らわられ侍と時信もさや
欲ふるられたる今とづく引起しづくまでうあつるればさう
小腹ときこむる物と中と一途ふを定むる事又係くせんと
る其時軍勢たふむひて空ひるる武運中々く傾きて南家の
滅亡迫る小僧くせ見あひるる弓矢の名がまじし日頃のよ
と忘るべし是を付中とひ後ふんごう中々ふ言のその
報謝の思ひ侍せども一家の運をせふそぬれば何とせう是と

報まき今と我のくぐの物小自害して生るの報恩死後小報せん
と存むるは仲時不肖なりともども平氏一教の名あがふ身なれ敵を
定む我首をさうりて源氏の事小く料を補ふ忠小備の忠と果
ぶ侍言のト小僧ぬらてあつとせぬと腹を切つ物なり糟粕二帝
宗秋これを見くあつとせぬの種小のるを侍を押して宗秋を中川自
害して真途の侍を侍とせんと存し侍ひ侍ふ先とせぬひぬる
幸こそはさうりたれ今生めては命は隙乃侍お逢見して事とせぬ真
途をんをく見たりとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬ
侍中ひらんて越後守が柄中を腹小はささくせぬとせぬとせぬと
て已が腹小は死して仲時を侍ふとせぬ侍らうとせぬとせぬとせぬ
是と始くと佐々木保俊本司子良次郎左衛門右三郎義房の志い
事九高橋五郎左衛門右三郎良直又日希日保日保日保日保日保日保
源七左衛門尉日保日保日保日保日保日保日保日保日保日保日保日保



番場驛

蓮華寺

北条仲時
再一旗
自害
古跡

本巻一六十七

洗の者として都合百二病或人何時小腹切つる血を其身に
起して恰も美河の流ま乃てくまら死骸の底に充滿して暗
乃因小美に彼さうの三千のてうまもあらん小亡びさう
に百万の士率河也に隔る人もこれゆゑを色に表さるる
幸とも目をあてられざらぬ言もあつる乃主上皇を以て死
どもの何うさぬ流流さう小肝も血を清身小それあされ果
せおつるさか下果

番馬の宿旅りて町を縁とら小所小あふさうも本原の道あり
樋口村石打と通りく名小町さあが井小着く

醒井

柏原中一里半に駅小三水四石の名所あり所中小流ありて
至く清く寒暑母と増減あり

日本武尊居寤清水所の中程民家の敷

古事記云 草那藝劍置其美夜受比賣之許而取伊服岐

能山之神幸行於是詔茲山神者徒手直取而
騰其山之時白猪逢于山邊其大如牛爾為言
舉而詔是化白猪者其神之使者雖今不殺還
時將殺而騰坐於是零大氷雨打惑倭建命
白猪者非其神之使者當其故還下坐之到王
倉部之清泉以息坐之時御心稍寤故号其清
泉謂居寤清泉也

十王水

諸取所は橋爪小ありしり浄貴神さう小あり

西行水

水よきそ乾くそと沢登の名小そ山沙小川乃面石
池子の里張あきとも怪しさ幸るんそあり

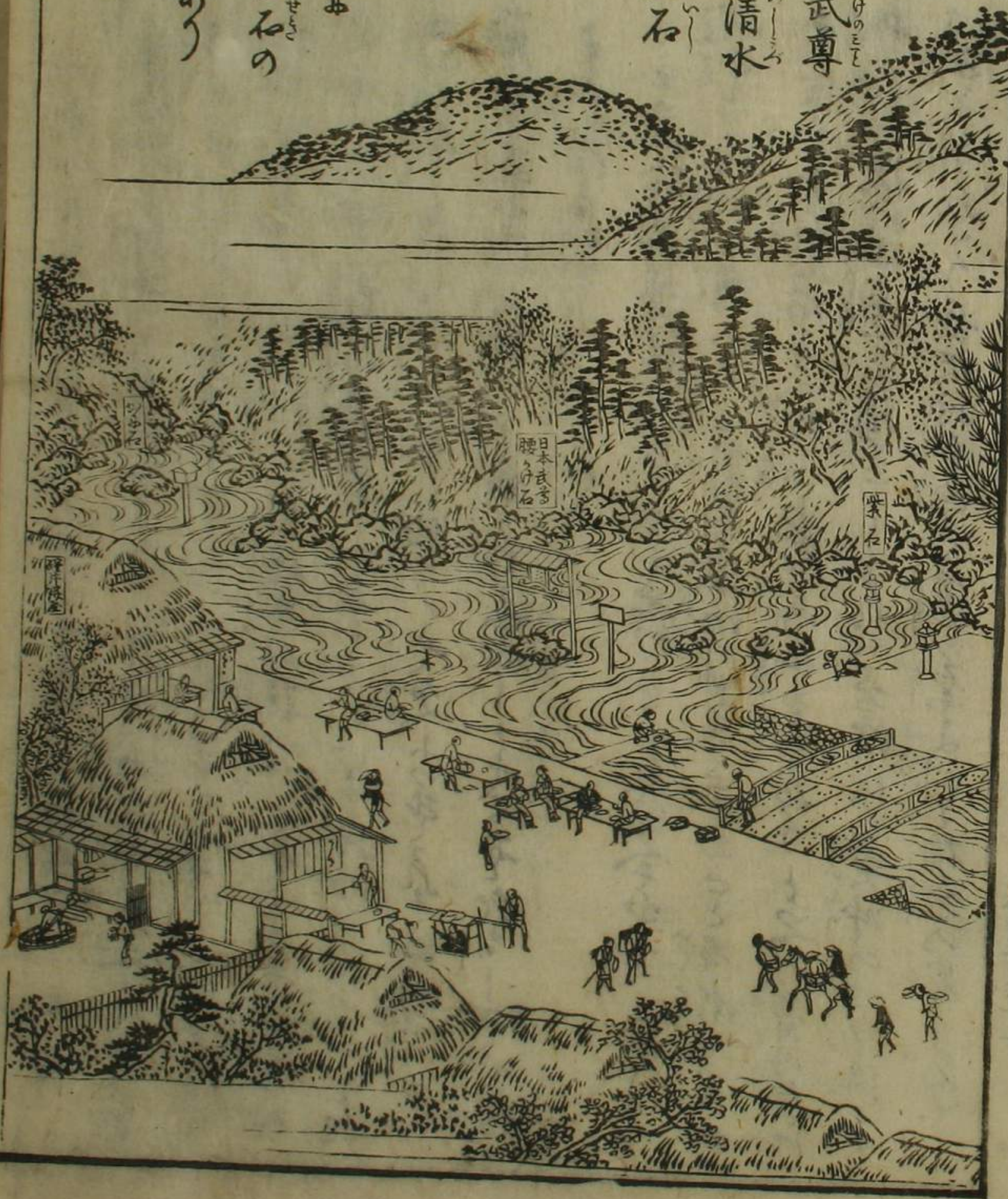
日本武尊腰懸石

日本武尊腰懸石伊吹山乃毒草と信め流るる
登石腰をけりて休息ありとあり

登石腰をけりて休息ありとあり

此所也
三水四石の
名蹟あり

日本武尊
居寤清水
腰懸石



醒井



本巻一七十

先形記

ひすふにふらふとすたふはせり是はあ井の水
高木笑一 醒弁を見ればけさした本の教光根より流るる水
法名あふをまらじき中ですりつてやせふ所もむむむ
附勢のまごけきしゆを程るまは性悪の根をよりてすまあふ東祖
媿婦の園雲の扇林風よあて志をくく口を種をまはまよ
道るれどもたちこむ幸物くく文よの根を彼西りか
尾形色中流の形くも板け志くくくく我たちくあつれと
よめれまあやのあや

この乃本陰に法水むすくしてさつとせ思護を免 元り
醒弁乃法水根祖くく一西むく安住川あ形くくこと幾流もくわ
あんど村をさぬあるく梓山あつたあ形くく形くくくく曾丹集に
梓山英流此中さく流まうるれは英流園之契沖の吐懐編ま
け款とせされく長沢村をさく書く原よ別と相原の宿小着く

相原

今頃中一里は駅と伊吹山の麓ありて
名産ありて伊吹艾の店あり

伊吹山 坂田郡東山にあり七高山の其一なり道は長流く
伊吹山 伊吹山 伊吹山 伊吹山 伊吹山 伊吹山 伊吹山 伊吹山
伊布貴 意布伎 伊夫伎 伊福貴 五十青 曠吹 異吹

後拾遺 新古今 新古今 新古今 新古今 新古今 新古今 新古今
長尾謙信塚 長尾謙信塚 長尾謙信塚 長尾謙信塚 長尾謙信塚
長尾謙信塚 長尾謙信塚 長尾謙信塚 長尾謙信塚 長尾謙信塚

